

氏 名	WELLS John Thomas
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文 学
学位授与番号	博甲第 6872 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 24 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	Kaneshige Tōyō's Style and Influences: With Consideration of the Elements of Copying, Chance, and Imperfection
学位論文審査委員	准教授 大久保 範子 准教授 岡本 源太 准教授 本田 晃子 清泉女子大学文学部 教授 佐々木 守俊

学位論文内容の要旨

本論文は、これまで概括的にしか論じられてこなかった備前焼の現代に至る展開について、その陶工として初の重要無形文化財保持者（いわゆる人間国宝）に認定された金重陶陽が果たした功績を美的要素と造形・焼成技術の両面から論じる初の論文である。本論文執筆者のウェルズ氏は、陶陽の孫弟子にあたる陶芸家の立場からその芸術様式、技術的な創意工夫、そして桃山期の備前焼を現代にふさわしい形で再生させた陶陽自身の学術的な探求を明らかにしようと試みている。

本論は Chapter1 から Chapter9 までの 9 つの節を、Section1 から Section4 までの 4 つの章に振り分けた形で構成されている。

Section1 では金重陶陽が人間国宝に認定されるまでの活動について 4 の Chapter（節）に分け検証しており、Chapter1 で年代ごとの活動内容、Chapter2 で陶陽に関する先行研究、Chapter3 で陶陽が主に手で成形する細工物師から脱却し轆轤に取り組み始めたきっかけを論じ、Chapter4 で陶陽がいわゆる人間国宝に認定される際に起きた他の備前焼の陶工たちとの軋轢について新聞記事等の記録を交え考察している。

Section2（Chapter5）では偶発性のある形状、不完全さ、粗放さ、無作為さ、また侘び寂びといった“現代の桃山備前”を構成する美的要素を表現するために、陶陽がどのような対象から影響を受け検討を重ねていったのかについて検証している。陶陽と同時代の美術の潮流や交友関係を検討することで、陶陽が荒々しさの残る桃山備前を単に再現したのではなく、昭和初

期に勃興した桃山期の茶の湯に関連した美的関心の高まりを背景に、当時の人々の需要を汲み取り、20世紀にふさわしいより洗練させた備前焼へと昇華させたと指摘している。

Section3では金重陶陽が復興させた昭和期の備前焼を取り巻く“創造と模倣”の問題について2つの節に分け論じている。Chapter6では陶陽が単に桃山備前を模倣したのかという美学的な問題について、Chapter7では不完全さや偶発性を感じさせる備前焼の形状は、意図的なものなのか否かについて考察している。筆者は他の美術分野に見られる日本の「写し文化」に言及し、陶陽もまた作品の形式以上のものを捉え、作品から醸し出される雰囲気などを含めた“本質”を理解し、表現する域にまで作陶の技術を高めていったと指摘している。また備前焼の一般的なイメージとしてある偶発性を感じさせる不完全な形状・雰囲気について、実際は作り手がある程度意図的に表現しようとしているものであるとし、このような要素が作品をより魅力的に見せるために重要な要素であることを自覚した上で、作為を感じさせない仕上がりに見せるための“余地”を残しながら作陶していたと考察している。

Section4 (Chapter8, Chapter9)では作陶の上で取り入れた技術的な工夫と新たな試み、また陶陽が所有していたと考えられる作品について2節に分けて検証している。陶陽自身が実際にどのような古備前の茶器を所有していたかについては肉親以外にほぼ知られておらず、筆者が陶陽の家族やごく親しい周辺の人々からの情報を元に綿密な考証を行なっている点は本論文の特色とあって良い。また焼成の技術について、桃山期の巨大な登り窯をそのまま再現して焼成したのではなく、昭和期の一般的な窯に改良を繰り返すことで陶陽が仕上がりコントロールしようとしていた点も指摘している。とりわけ見事な窯変を可能にした“秘密室(スアナ)”とも称される登り窯の工夫は、写真やスケッチを用いながら詳細に図解されており、筆者の陶芸家ならではの視点が反映されている。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は2022年2月8日(水)15時より、学内審査委員3名(岡本源太准教授、本田晃子准教授、大久保)に学外審査委員1名(佐々木守俊清泉女子大学教授)を加えた計4名によって行われた。

はじめにウェルズ氏から、本論で明らかになった知見を中心にプレゼンテーションが行われ、質疑応答へと移った。以下はその概要である。

Section1では、本論の背景として金重陶陽が人間国宝に認定されるまでの活動を年表、先行研究、新聞記事等から4つのChapter(節)に分け検討している。とりわけChapter4の人間国宝認定時に起きた備前焼に携わる周辺の陶工たちの反発や抵抗を新聞記事等の記録や人間関係を元に丹念に考証していく過程は、当時の備前陶芸界の様子を鮮やかに想起させるものであり、本論のハイライトのひとつと言える。一方でChapter1がほぼ年表的な記述に終始している点が学術論文の構成として適切なのだろうかという意見が出され、導入に当たるIntroductionとSection1を練り直し、

研究背景としてより相応しい形に修正する必要があるという結論に至った。

Section2 (Chapter5) では当時の文化面における潮流、具体的には桃山の美意識の再評価が進む中で、陶陽の作陶がいかなる点から影響を受けたのかを考察している。ウェルズ氏は英国人蒐集家であった James Lord Bowes の言葉を引用し、少なくとも 19 世紀末のヨーロッパでは備前焼の不完全さや無作為さ、また侘び寂びといった美的価値観に積極的な評価は与えられておらず、むしろ光岡忠成らをはじめとした昭和初期の茶陶に関わる人々によって桃山の美意識が再発見され、彼らとの交友の中で陶陽も“現代の桃山備前”を生み出すに至ったと具体的な資料を提示し論じている。審査会ではこの論旨に同意しつつも、論文の中で挙げられた桃山復興に関する参考文献や考察が少ない点を指摘し、陶陽だけに限らない大局的な視点で当時の桃山復興を議論すべきではないかとの意見が述べられた。

Section3 (Chapter6, Chapter7) では、陶陽が桃山期の作品を単に模倣したのか否かという問題について検証している。ウェルズ氏は陶陽が作陶時、より“無作為の作為”とも称される不完全さを表現しうる余地を意図的に残していたことを、複数の桃山備前作品や山本陶秀らによる昭和期の作品と比較しながら論じており、提示された作例からは高い蓋然性が感じられる。一方で陶陽が桃山備前の復興を昭和に行う際、どのような美的要素を自覚的に表現しようとしていたのかについては明確な結論がみられず、今後の課題と言える。

Section4 に含まれる 2 つの節 (Chapter8, Chapter9) は、ウェルズ氏が金重家に非常に近い立場で作陶を学んだ陶芸家ゆえに執筆できた新知見に富む章である。Chapter8 では陶陽が実際に所有していたと考えられる古備前の作品と、その影響をとどめる陶陽作の作品が取り上げられているが、このような作家個人のコレクションが制作活動に与えた影響について実例を示しながら検証できている点は説得力があり、研究へのアプローチ方法としても高く評価できる。Chapter9 の焼成についても、桃山期の登り窯と陶陽が用いた現代の窯の違いを踏まえた上で、陶陽が出来の良い造形の作品に、桃山期の優れた作品に見られるような窯変を効率的に出すための工夫を重ねていた点を明快に示しており、研究のオリジナリティが発揮された部分と言えるだろう。

以上の点に加え、審査会では日本語を英語に翻訳する際に生じた誤記、誤訳の問題についても指摘があった。本論文の海外での公表の際には細心の注意を払うべき点であり、確実な修正が必要である。また筆者であるウェルズ氏が金重陶陽に非常に近い立場であるが故に、新知見に富む研究が可能になった一方で客観的な視点の重要性についても指摘がなされた。

しかしながら、備前焼初の人間国宝に選ばれた金重陶陽の作陶の全容、また彼が体現するに至った現代の備前焼を歴史・作陶両面から論じた点は、技術的な考証のオリジナリティとともに自らも陶芸家として活動するウェルズ氏だからこそ可能になった研究であると高く評価できる。

審査委員会は以上の点に鑑み、本論文を岡山大学の博士（文学）の学位論文に認定することについて全員一致で合意した。